

特集記事 ② 日本演劇研究コース：公開講座「浄瑠璃」

稀曲奏演 義太夫「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」

2009年10月1日(木) 14:00～16:00 大隈小講堂 浄瑠璃 豊竹英大夫、三味線 鶴澤清友、解説 内山美樹子

「和田合戦女舞鶴」は元文元年(1736)大坂・豊竹座で初演された全五段の時代物。三段目切「市若初陣の段」は、戦前までは人口に膾炙した曲であったが、1945年以後は稀曲となっている。ただ十世豊竹若大夫が昭和25年(1950)に襲名披露曲として語り、最晩年昭和40年(1965)にも名演を聴かせている(東京・大阪)ので、若大夫を知る世代には忘れ難い曲である。大阪の文楽公演ではこの1965年若大夫所演以後、上演されていない。東京の文楽公演では一度取り上げられたが、強い手応えを残すことなく、以後二十年間上演されていない。

日本演劇研究コース・人形浄瑠璃文楽の研究会は、初代豊竹若大夫(越前少掾)初演、東風の代表曲「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」の現代的魅力を期して、十世若大夫の孫である豊竹英大夫師に取り組みをお願いし、三味線は鶴澤清友師に御引き受けいただいた。

2009年10月1日公開講座「浄瑠璃」の日程が確定する前から、英大夫師と浄瑠璃研究会は二回の講演会(2008年3月24日・2009年2月24日)、その他の機会を通じて、「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」の戯曲内容を読み抜いた。公開講座「浄瑠璃」のチラシに「見えない政争の渦に巻き込まれ、残酷な選択を迫られる板額の悲劇」とある「残酷な選択」とはどういうことか、板額が市若に自ら切腹させるように仕向けるのはなぜか。作品を読み直していく中で、英大夫師は、板額の行為は「市若の顔を立てるとのことだ」と喝破した。

親が子供をだまして自害させ身替りに立てる、残酷でいや



な芝居、といったこの作品への否定的評価(かなり一般化している)は、2009年10月1日英大夫・清友両師による「市若初陣」の感動的な舞台の前に、根拠を失った。「こんな素晴らしい作品を語れて仕合せだ」「市若はかわいそう、ではない。この少年なりに、いい人生を生きたのだ」(奏演後の英大夫師談)。二十年以前の演者にはなかった作品との出会いを、英大夫・清友両師は、そして聴衆は、体験することができたのである。

英大夫・清友「和田合戦女舞鶴 市若初陣の段」は10月10日午前11時、NHKラジオFMで放送される。放送時間の関係で十数分のカットを余儀なくされたのは残念だが、ともかく全国に放送され、この曲が再認識される契機となり得るのは幸いである。

因みに1981年以来、回を重ねた公開講座「浄瑠璃」で、筆者が現役教員として解説するのは、今回が最後となる(公開講座「浄瑠璃」については、詳しくは『演劇映像学2009』第3集など参照)。(事業推進担当者 内山美樹子)